京都大学新聞

学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
(761) 2054 直通
(751) 2111 (内線2571)
振替・京都3909
1部 70円

クラスコンパ・宴会の御相談承ります
割烹 きよす
スキヤキ・ナベ料理一切
寺町通今出川上ル
TEL
(231) 5121
(231) 5122

晩年の道元

鎌倉下向とその失敗

生涯引きずり続けた俗縁

柳田聖山

城邑・聚落に住するなかれ、国王・大臣に近づくなかれ。『ただ深山幽谷に居して、一個半箇を接得し、吾が宗をして断絶を致さしめる勿れ』。

大宋紹延のはじめ（一二二八）二十九歳の道元は、如浄の送別のことばを胸に秘めて京都に帰着する。そして、翌年の十月、如浄の訃報がとどく。それから十五年、菩提寺興聖寺をすてて、突如として越前に赴きつゝ前後の事情は、研究者をあげての究明にもかかわらず、今なお謎につつまれているが、道元の胸に前記の如浄の遺訓があらためて甦っていたことは確かだろう。

じじつ、道元が越前に移る前年、如浄の訃報が京都にとどく。在宋の中国僧曾が、道元のために持に送りとどけてきたものだ。道元は感激し、くりかえし耽読し、そして落涙する。わが胸に抱きつゞける如浄のことばを、そこにかなりのひらきを認めたためだ。道元はひとり、「私」の如浄を追うことになる。

如浄は、中国越州の人である。道元は越前にゆくに際し、先師の故国に帰る経済であったという。そこには、単なる語呂あわせに尽き何かがあった。中国の越州とちがって、わが越前は北国である。生来蒲柳の道元にとって、越前の生活は地獄である。三国仏教史上、その類を見ない道元の正法眼蔵が、この大地で育まれる。

「ところが」である。道元は四十八歳のとき、自から鎌倉に赴く。北条時頼と会うためである。前後七ケ月、かれは永平寺を留守にする。彼多野義重や浄土宗の良忠上人の懇ゆ仲だちがあったにしても、道元が時の最高権力に屈し、そこに、単なる語呂あわせに尽きるものがあるのだ。道元が永平寺に帰ったあと、時頼は鎌倉に建長寺をたて、宋僧蘭渓を招ぐ。

道元よ、オマエもか。道元の変節をなげくことは易い。しかし、この事実そのものの究明は、必ずしも簡単な仕事でない。

最近、東北大学の山折哲雄氏が、新しい「道元」を置った。鎌倉ゆきの一段を、わたくしは食るように読んだ。そこにとりあげられる「鎌倉名越日長宗論」と、その背後にある温製経の阿闍世王逆害ものが、たゞの問題が、親鸞の教行証信の巻の後半部の同じ引用と重ねあわせて論ぜられているのに、限りない興味をおぼえて、かねて空想しつづけている私見をまとめてみようと思いたった。じつは、阿闍世王逆害の話については、武内義範先生にすでにもう一つの論攻のあることを想起するか

中国政治動向（一）

一、革命三〇周年の中国

〈人民中国〉は、一九四九年、熾烈な内戦の中から全世界のプロレタリアート人民の期待と希望を一身に受けて、その成立を高らかに宣言した。この第二次中国革命の勝利は、言う迄もなく毛沢東主義の勝利であり、「後進国」革命の勝利として歴史に刻印された。

この中国人民の偉大な勝利から三〇年、我々は今〈人民中国〉に対していろいろ事態の内に、等閑に付すべきはあまりにも巨大なものを視ている。すなわち、一九六六年、周恩来死去、天安門事件（第小平失脚・華国鋒登用）、朱徳死去、毛沢東死去、天安門事件（第小平失脚・華国鋒登用）、朱徳死去、毛沢東死去、「四人組」検挙、七七年、「四つの近代化」路線定立、全国的反「四人組」闘争、対ベトナム「懲罰」問題、七八年、鄧小平「復活」、「実事求是」キャンペーン、日中条約締結、呉德（北京市党委主任）解任、「プロレタリア文化大革命」否定＝天安門事件逆転評価、北京「大字報」運動（毛沢東「神格化」否定）、米中「正常化」と引き続いた一連の事態の内には、〈人民中国〉と毛沢東主義を理解する鍵が秘まれると言わざるを得ない。とりわけ、七八年右月一一日「光明日報」での「毛沢東絶対化批判」論文以降、一一月一五日「光明日報」での「姚文元論文（＝文化大革命の導火線）批判」論文、天安門事件逆転評価（北京市党委主任）

中国見聞録

中国東北地方をまわって（4）

―都市の生活―

川合　仁

中国は現在「四つの近代化」路線を進める中で、重工業を中心とした工業生産の向上に力を入れている。"社会主義国"に於いて、工場に働く労働者たちとって確かに"解放前"よりは生活は向上している。

しかし中国の工業も、公害問題や労働災害から目由であるわけではない。

今回は労働者の工場内での生活、福祉、公害等の様々な問題について、現代中国の抱える様々な苦悩が描かれている。（編集部）

長春第一自動車製造工場

接待課長の説明によると、この工場は五三年にソビエトの援助を受けて着工し、五六年から生産を開始した。当初の生産目標は年間三万台のトラックであったが、現在は年産六万台である。トラック以外に一部紅旗という乗用車を作っているが僅かである。

工場の敷地面積一五〇万㎡、建坪は六〇万㎡、敷地内の空地には緑を豊富に配して公園化してある。三二の職場に分れて、労働者総数は二万五千人、内女性は四分の一である。ソビエトの援助中止以来、自力更生方針でやっており、現在は大慶に学ぶ運動を展開中であり、機械設備を改造して技術革新し自動化、ライン化促進をめざしている。

工場敷内に一度入ると、まず最初は騒音ホンは優に越えていると思われる騒音に圧倒される。ここで、数年間働いたら職業性難聴（騒音の中で、はきこまれるが、微かな所ではきこえにくくなる病気）の発生は避けられないのではという考えが頭をよぎる。地上で働いている人が僅かである。

工場内各所に、小組単位の勤務評定表とともに「一人人有責、安全生産」の標語が多数かかげられているのが目につく。ライン化されている行程にそって見学を終え、やっと騒音の中から抜け出せるかと思った途端に、最後の衝撃を受ける。前工程の労働者の眼先で、車のテストが行なわれ、排ガスが労働者を襲撃しているのである。

この工場の見学を通じて、私達はいくつかの工場を見学した。その中で労働者の健康、安全問題はかなり深刻だなという実感を抱いていた。と同時に労働者はそれをどこまで自覚しているのかという危惧も抱いた。

例えば、従業員約二七百人（女性四二%）の大東ガラス工場では、革手袋・弁当室・作業員の女性労働者はパンのように膨脹する。

"私達は生産増産と健康管理の目的で多くの技術革命をしてきた。毛皮は労働者の健康には最も配慮しなければならないというと、解放前は筋繊状態で行なわれたため粉塵は二六〇㎎／㎥で、七〇%の女性に塵肺症を生じた。解放後これを湿式化し粉塵を〇・五㎎／㎥に抑えている。（業務2以下）に塵肺症に終止符を打った。それから……"

しかし工場内各所を回ってみると窯内の粉塵は相当なものに見受けられた。窯内の換気設備も充分なものも見当らず、労働者もそれをさほど気にしているようでもなかった。ただこの工場の定年が男性五五歳、女性四五歳となっており、他の工場に比べて五歳以上早くしてあるのは健康への配慮ではないかと思われる。

ハルビン工業工場の羽毛細工職組合もあり、若い女性労働者が有機溶剤の入った接着剤を、使う前に必ず手当っているのを見て、日本人の工場の労働者の福祉、職場の安全確保などの仕事も工夫の余地があるなと思った。

工場に隣接して、十万人規模の自動車工場勤務者団地がある。ここには、十ヵ所の幼稚園及び託児所、十一ヵ所の小、中学校、三四ヵ所の食堂、一ヵ所の工場病院（五〇〇ベット）、二四ヵ所の衛生ステーション（診療所）、若い労働者向けの中等専門学校、マチュア夜間大学、各種クラブ、体育場、図書館、百貨店、書店等がある。地方に分布している分工場では農業との協力関係を作っている所があるという。

解決出来ていない公害問題

大連港湾周の高いビルの屋上にのぼって周辺を眺めると、のどかな大連湾、老虎灘の岡、星海公園などの公園等を美しい海岸線に沿って配置されている。

しかし、公害の問題に関しては、対応策は出た部も聴そうとしない。煤煙などは無しようないが、公害は日本のようにひどいだろうという姿勢が強いからか。前回詳述した大連車両工場でも、排水、排ガス対策共に充分である。排水処理水を濾過用水に使っていることもあって困っていると説明する。

順民政府も第下流の川の水汚染が解決していないという。団員の一人が、長春市の都市計画関係の幹部と会ったときに聞いた話では、自動車工場が市街地の風上にもってきたことで頭を悩ませているとのことである。

大都市撫順のことで、コンビナートのすぐ脇まで住宅群が迫っている。四日市型公害は発生していると思いない。

公害の問題に関しては、対応策者のための養老院である。院長の説明によると、四九年十月、主主席の老人に対する深い配慮から設立された福祉施設である。現在の入所者は七〇名で大部分はもと炭坑労働者（舞踊のみ）で、皆旧社会で苦しい生活をしていた。山東、河北から引っ越し、毎日十二時間以上働いたにも拘らず、食べるものもない状態で、結局出来る状態ではなかった。入所者達は解放後の社会建設に加わり、その生活も向上した。現在は均三五元（業務六〇元以上）の年金支給を受けている。施設費、部局代、医療費、娯楽費は全部国家負担、食費は十八元かかるが、自己負担は平均三・五元である。略内に衛生所があり、医者二人が交代で勤務、看護婦は二人勤務している。職員数は三〇人。

撫順市工人養老院

北京のホテルの窓から、朝五時頃すでにホル前の広場に二、三〇人の老人達が輪になって太極拳をやっているのが見られる。私達がホテルを出発する頃まで続けているから、二、三時間以上はやっているのである。前にふれたように定年は男性五十六〇歳、女性五〇―五五歳で、退職後は、退職時月給の七、八割の年金をもらいたいとの事である。酒はどこで飲んでもよく、分け売りもするとのこと。

入所者は平均年令七〇歳（最高九〇）で、町の掃除に行ったり、野菜、花を植えたり、食堂の手伝いをしたりしている。五八歳で退職し、現在七〇歳になる老老人は朝早く起きて散歩したり、ゲームをしたり、バスに乗って買い物に出かけたりと、楽しい生活をしている。

工人養老院は撫順炭鉱定年退職者のための養老院である。院長の説明によると、四九年十月、主主席の老人に対する深い配慮から設立された福祉施設である。現在の入所者は七〇名で大部分はもと炭坑労働者（舞踊のみ）で、皆旧社会で苦しい生活をしていた。山東、河北から引っ越し、毎日十二時間以上働いたにも拘らず、食べるものもない状態で、結局出来る状態ではなかった。入所者達は解放後の社会建設に加わり、その生活も向上した。現在は均三五元（業務六〇元以上）の年金支給を受けている。施設費、部局代、医療費、娯楽費は全部国家負担、食費は十八元かかるが、自己負担は平均三・五元である。略内に衛生所があり、医者二人が交代で勤務、看護婦は二人勤務している。職員数は三〇人。

建物は管理棟と居室棟に分れており、管理棟には会議室、自習室、娯楽室、食堂がある。居室は十二畳程度、半分が十間の半分がオンドル付きの床になっている。部屋には掛時計、電灯、戸棚各一ヵ所がある。一寸感心したのは酒びかりがするほど並んでいたことである。酒はどこで飲んでもよく、分け売りもするとのこと。

入所者は平均年令七〇歳（最高九〇）で、町の掃除に行ったり、野菜、花を植えたり、食堂の手伝いをしたりしている。五八歳で退職し、現在七〇歳になる老老人は朝早く起きて散歩したり、ゲームをしたり、バスに乗って買い物に出かけたりと、楽しい生活をしている。

労働者の学生が概同じも来ている。完璧に酒や缶詰も賞える。旧社会では考えにも思わなかった活所であるとは驚嘆をはって説明する。

これが満更ほらでないことは、衛生所の看護婦の説明からもうかがえる。七〇人のうち常時活発を受けている